

二〇二三年七月二八日

月涼し古都の大路を照らしけり
落蟬の沙弥の箒に掃かれけり
大椰子に凭れ沖見るサングラス
水底の影で目高とわかりけり
向日葵の丘へ傾く夕日かな
夏霧に現れては隠る一山家

あひる
かえる
智恵子
うつぎ
素 秀
澄 子

二〇二三年七月二七日

ビー玉を褥としたる水中花

せいじ

二〇二三年七月二六日

リハビリの歩け歩けと蟬時雨

かかし

夏空や空港の名はこうのとり

こすもす

昼寝覚あの世この世と入り混じり

うつぎ

二〇二三年七月二五日

置き配の立てかけてあり西日中

せいじ

犬小屋の小さき葦簣に尻出でし

なつき

昼過ぎを知つてゐて止む蟬時雨

満 天

二〇二三年七月二四日

夏空へ帆を揚ぐるごとシート干す

む べ

二〇二三年七月二三日

結界の内へ落蟬戻しやり
夏雲を貫き出づる機影かな
左右の耳へと転調す蟬時雨

なつき
たか子
せつ子

二〇二三年七月二二日

隧道口簾となりて蔦茂る
連綿とアルプスなせる雲の峰
瀬の楽にたたみかけては蟬時雨

素 秀
きよえ
せいじ

毎日句会みのる選・二〇二三年七月三〇日